

特救戦姫  
Invincible Sisters  
エクス

二次元ドリームノベルズ/PDF立ち読み版

小説 栗栖ティナ

挿絵 Maruto!

第一章	参上！ インビンシブルシスターズ	006
第二章	触縛の再会	034
第三章	裏切りの淫宴	076
第四章	翻弄されし心	124
第五章	禁断の想い、実るとき	186
終章		248

## 登場人物紹介

Characters



いかるが ゆき  
**斑鳩 雪希**

特殊な戦闘スーツ姿に変身し、侵略者と闘う少女。落ち着いた物腰で、冷静沈着に敵を討つ。変身時は「ペルディータ」を名乗る。

いかるが おうか  
**斑鳩 桜花**

雪希の双子の妹。活発な性格で、剣道部に所属している。兄に対してついでに厳しくあたってしまう。変身時は「アトル」を名乗る。

いかるが たくみ  
**斑鳩 拓海**

雪希と桜花の兄で、天才的な科学者。一年前、妹たちに変身スーツを残して姿を消してしまった。

### エレン

外宇宙から地球に侵略してきたスケアニア軍の司令官。大胆に肌を晒すコスチュームに身を包む美女。

れ上がつていくのを感じた。どういいうわけか、身体の芯が熱くて堪らない。

(こんなの、耐えられないよ……早く、早く終わらせないと！)

一刻も早くこの苦行から逃れたい。その一心で、雪希は口と手の動きを活発にする。舌を口の中で回すように動かし、上顎にまで貼りつく竿肌全体を舐め上げる。

「んじゅるるるうっ、はむう……えぐうっ、はみゅんんっ——ふあむううっ！」

ズチュルッ、ジュリユルルッ、ジュブポオッ!!

高鳴る水音。唇の端から零れ出す粘液が、次第に泡液へと変わる。立ち昇る腐臭もより一層濃厚になり、鼻の粘膜が麻痺するほどに強く匂ってきた。

(臭い……ンッ、早く、早く終わってえっ!!)

胸を突く嫌悪感が、少女の奉仕を更に熱の入ったものにしていく。顔を前後に大きく動かし、窄めた唇で長い竿を抜く。両手も、壊れたワイパーのような素早さでやたらに左右へ振り動かし、肉紐を摩擦熱で燃やしてしまおうとするが如く激しく擦った。

(いやっ、手袋しててもヌルヌル染み込んできちゃう……ううっ)

表面に付着した粘液が、指でこそげ取られるようにして飛び散り、大きく開いた胸元にまで飛び散ってくる。乳肌を打ち叩くべたつきに顔を顰めながら更にスパートをかけた。

「おおおっ、むぐう、ちゆるうう!! じゅぽおおっ、れえろおお、あちゅうっはぶう！」

卑猥な水音を舌先で奏でながら、一心不乱に口奉仕を続ける。一体、いつまでこれを続けなければならないのだろう？ 普段ならば絶対にしらない激しい動きに、舌全体にだるさと鈍い痛



みが広がり始めた頃、口を埋める肉紐が、空気を注入されたかのように急激に膨らんだ。

「ふえっ……んぶうっ、ふぁ？」

唇がグッと強く持ち上げられるような圧迫感。戸惑いの声が漏れた直後。

ドブウウウウウウツッ！ ドビユウツ、ドビユウウウウツッ！ ビユボボオツッ！

「んんんんううウウウ！！ あつつうっ、あひゃあ——んじゅううううっ……はびゅう！」

地鳴りのように低く響く音と共に、白濁の大放射が始まる。今までのものが霧雨程度だとするならば、バケツをひっくり返したような夏の夕立くらいの勢い。口の中で熱液の大砲を発射されたような衝撃が、白濁粘液と共に体内を流れる。

飲みきれはるはずもなく、ぴったりくっついた紐肌と唇の隙間をこじ開けて、溢れる白液が水鉄砲のような勢いで噴き出した。ピチャピチャと音を立てて襟首に落ちた白濁は、そのまま浅い胸の谷間を濁流となつて流れ落ち、青い布地で守られた腹部をも汚していく。

「うぐうううっ……げほおっ、じゆるるううんんっ！ 飲めなあっ——あむうう！」

布越しに肌を感じる熱も、食道が破裂しそうな勢いで胃へ流れ落ちる熱液の感触に塗り潰されてしまう。粒のゼリーが入り混じったジュースのような、限りなく固体に近い汚液。粘着力も増し、咽頭や粘膜にしつかりと貼りつき、べたつく不快感が残る。口を開けただけで、自分の身体の中から最悪の腐臭が漂ってくるのがはつきりとわかった。

（苦しい……死んじやいそう……でも、でもこれで満足してくれた……？）

時折意識が白いモヤに吸い込まれるくらい朦朧としながらも、口奉仕をやり遂げたこと

に安堵を覚えた。その思いを後押しするように、放出を終えたミミズ紐が、ゆつくりと胴を引いて口の中から抜け出た。

ようやく解放された口。早速大きく唇を開け、深呼吸をしようとした刹那。シウルシウルと伸びた別の肉紐が、間髪入れずに口の中に飛び込んできた。

「もおおっ!? おおおっ……んうぐつあはああつ、ま、まだあるう……くうう」

不意打ちで飛び込んできた肉紐。しかも今度のは先ほどよりも更に一回り巨大で、竿肌を上顎に貼りつき、上下の歯に食い込んでしまうほどにキツキツだった。それなのに欲望を剥き出しにしたミミズは、すぐさま強引なピストン運動を始める。ざらついた肌面で、逆に歯の方が削り取られそうな痛みが走った。

息継ぎの間すら与えられず、雪希の青い瞳が次第に光を失っていく。意識が白いモヤに包まれる瞬間が多くなり、完全に失神してしまいそうになる。

(ミミズ……まだ、まだあるの……嘘……こんなことつてえ……)

よくよく考えてみれば、ワームノイドの数は十や二十では済まない。その一体一体の中に、更に無数のミミズ達が詰まっている。まさか、そのすべてに奉仕しなければならぬのだらうか。胸の奥が真っ黒に染まる絶望が生まれる。

「ひふうっ、はむうっ……ちゆるるるるうっ! いやあつ、はあああつ!!」

それでも反射的に舌を動かし、両手で肉竿を抜く。羞恥や屈辱を感じる余裕もなく、ただ家族を救いたいという思いが、無意識に命じられた奉仕活動を続けさせていた。

『あら、もしかしてもう限界？　ふう……赤い小娘は、まだまだ壊れずに頑張ってるって  
いうのにねえ。ちよっとハードにしすぎたかしら？』

スクリーンの方から、エレンの呆れたような声が聞こえてくる。だが、最早それに強気に  
言い返す余裕も残っていない。今はとにかく、言われるまま耐え続け、反撃の機会を窺  
うしかない。朦朧としながらも、そんなことを考えて自らを鼓舞していたとき。

「ペルディータ、いじめられてるの？」

ミミズ達の蠢動音に混ざって聞こえた無邪気な声が、少女の意識を現実引き戻した。

咄嗟に声の方に視線を向け、その光景に目を見開く。群がるワームノイド達の肉壁の一  
角がいつの間にか開かれ、その向こうにズラリと立ち並ぶ不安げな人々の顔。ビルの中に  
避難していたであろう人々が、ミミズ奉仕を強要される戦姫の哀れな姿を見つめていた。

「ふえっ……あつ、ああ……」

一体、いつから見られていたのか？　ショックで悲鳴すらまともに上げられない。奉仕  
の動きも止まり、身体が石像にされたかのように固まってしまった。

「ペルディータさん、ミミズさん食べてるの？　病気になるっちゃうよー」

「ドロドロにお洋服汚れちゃってる……ママに怒られちゃうねえ」

雪希が強いられている行為がなんなのか理解できないのだろう。幼児達はキョトンとし  
た顔で首を傾げている。行為の意味がなんなのか理解できる大人達も、それを細かく説明  
するわけにはいかないのだろう。女は顔を赤らめたり、汚いものでも見るような目で顔を



逸らし、男は好奇をあらわに浮かべた瞳で、白濁に汚された乙女の姿を凝視していた。

(見られてる……みんなに……そんな……)

自分と桜花を希望の星と崇め信頼してくれている人々に、忌まわしいミミズへ奉仕する姿を見られていた。苦しみの底に沈んでいた羞恥の感情に、再び暗い灯火がつく。

ビュルルルッ！ ビュブブブブブ——ビチャアアッ！！

「ひやあああつ——つうううつ、あちゅつ……んんつ、ほっぺにかかっつてえっ！」

呆然としている隙に、両手に握る男根が勢いよく弾ける。熱湯で溶いた石膏を浴びせかけられたかのように、顔全体が真っ白に染め上げられる。ぼつてりと重く貼りつく精液糊がゆっくり流れれるのに合わせ、頬が強く引つ張られるように痛んだ。

「すげえな……あんなにぶっかけられてよ。エロいなんてもんじゃないぜ」

「可愛い声出してるしなあ……。気持ちいいのか、あれが？」

男達が声を潜めて呟きあう声が、妙にはつきり聞こえてくる。

「ひやあぶうむウッ、み、見ないでえっ！ 違うのお、これ違うんですう！！」

必死に否定しようと首を小刻みに左右に振って訴える。ミミズ触手を唾えたまま、淫靡な水音交じりの声では、説得力の欠片もないことが自分でもわかった。

「……いやらしい子ね。ほら、見ちゃダメ！ あれはいけないことなのよ！！」

「元々いやらしいとは思ってたんだよな。あんな露出狂みみたいな服で戦ってるしよお」

嫌悪剥き出しで、子供達の目を隠そうとする女達。次第に興奮に声を上擦らせる男達。

今までの称賛と感謝とはまるで違う、人々の手の平を返したような罵り声。押しつけられるミミズの粘着感よりも、雪希の気丈な心を削り取っていった。

「見ないでください……そんな、違う……あむうっ、じゅぶうひやむウウッ」

訴える声が、普段の氷のように冷静沈着なものでない、か弱き乙女の甘声になる。肌を染める羞恥の朱色が濃くなり、高熱を出したかのように身体の芯が火照り始めた。

見守る男達が息を荒くしながら前屈みになってきているのに気付く。若者から中年、そして白髪交じりの老人まで、その股間部分に異様な膨らみができ上がっている。口や手の中で膨らみ続けている肉紐を思わせる膨張。ミミズ汁塗れになって身悶える自分の姿に欲情されているのだと雄弁に教えてくれるなによりの証拠。

（そんな、みんな……私で興奮してる？ エッチな気持ちになってる……そんなっ！）

見目麗しい分、街中でいやらしい男の視線を投げかけられる機会もそこそこあった。だが、ここまで直接的で無遠慮な欲望の眼差しを受けるのは初めてのこと。見られているだけで、ズボンに隠された肉棒を押しつけられていたような嫌悪感が生まれた。

「あらあら、あなたがそんなにエッチな格好しているから、みんな火がついちちゃったみたいねえ。責任取らないといけないかしら？」

甲高い声と共に、スクリーンから響き渡る乾いた鞭音。それと同時に、まるで潮が引くようなスムーズさで、青髪の少女を取り囲んでいたミミズ人形達が後ろへ引き下がった。

「ふえっ……あっ……」

口を埋めていたものも、顔中を埋め尽くしていたものも。押し当てられていた熱塊達が一気に離れていき、不思議な冷気が液塗れの頬を撫でた。唯一、両手を拘束する二体だけが残り、脱力した少女の肢体を無理矢理引っ張り立たせる。

衝撃で、ゼリー状の白液が塗られた乳房が上下に揺れ、谷間に溜まった白濁がドロリと小さな音を立てて臍の辺りまで流れ落ちた。まるでミミズに撫でられたような不快感を覚え、背筋がビクビクと震えてしまう。

「どうする気なの……私を一体……くう……はぁ」

ミミズ状肉棒から解放されたものの、胸には更に暗い不安が湧き上がる。あのサディスティックな女指令官は、次はなにを命じてくるのか？ 死刑宣告を待つ囚人のような絶望を噛み締めながら、じつと言葉を待ち続ける雪希の周囲が、再び人影に覆われた。

「おっ、おい！ やめる……お、押すなよ!!」

「ひっ、命はた、助けてくれえっ!!」

次々に上がる悲鳴交じりの声。弱々しく顔を上げ、白濁で汚れたバイザーの隙間から辺りを見渡す。先ほどと同じように、グルッと少女を取り囲む影。人質の中、好きな眼差しで見つめていた男達ばかりが、ワームノイド達に連行され、集められていたのだ。

突きつけられる銃や剣で脅されて恐怖を浮かべていた男達だが、その顔はすぐさま目の前の乙女の痴態によって発情の赤色へと変わった。白濁液で汚された顔や胸元。食い込みの角度が際どい股布の部分。剥き出しになったミルク色の太股。身体全体に、無遠慮な欲

望の眼差しが向けられているのをはつきりと感じる。

「見ないでください。お願い……」

男達の視線を意識すればするほど、胸の奥で羞恥の炎が勢いを増す。頬が燃え上がるように赤く染まり、すぐにでも逃げ出したい衝動に駆られた。

「見るなって言われてもなあ……こんな目の前で……なあ？」

「ああ。ドロドロで……目に毒だよな。はははっ」

男達は、気まずさを乾いた笑いで誤魔化しながら、白濁漬けとなった少女を凝視し続ける。ゴクリと生唾を飲み込む音すら聞こえてくる。ズボンを突き破らんばかりの膨らみが息を合わせたかのように、揃って肥大し続けていた。

「大体、けしからんよ！ なっ、なんだね、この格好は。正義の味方にしちゃ……教育上よくない!! 見なさい、この……胸が丸見えじゃないかね！」

立ち並ぶ中、眼鏡をかけたインテリ風の中年男が、自らの欲情を正当化させようと上擦った声で叫ぶ。その指先が向けられたのは、白濁ソースを谷間に流された対の白桃。

「そんな！ だって、これは……そんなつもりじゃなくて!!」

羞恥熱で赤く染まった唇を震わせ、必死に反論する。なにも好きでこんな露出過多な服を着て戦っていたわけではない。人々を守るため、羞恥の心を押し殺し戦っていたのだ。

「そうだなあ、いつも目のやり場に困ってたんだよなあ……俺も」

「だよな。胸もそうだけど、股のところとかもつとヤバイぜ？ 可愛いお尻なんて、Tバ

ツクかつてくらい食い込んでるしよお」

正義の戦姫の言葉も虚しく、男達は口々に中年男の言葉に賛同していく。興奮し、視姦している自分達は悪くない。それを煽る格好をしているお前が悪いんだ。そんな身勝手な論理が言葉の端々に滲み出ているのがはつきりわかった。

「いやあっ……言わないで、そんなこと……違うんです！ 私だって……私だって恥ずかしいけど……でも、これを着ないとスケアニア軍と戦えないから……」

涙ながらに必死に訴えるが、揃って熱に冒されたように虚ろな目になり始めている男達は、まるで聞く耳を持ってくれない。監視するワームノイド達に押されるように人垣の円は狭まり、遂には荒い鼻息が雪希の頬を撫でるくらい密着してしまった。

「恥ずかしいってわりには、いつも隠そうともせず戦ってたじゃねえか。おまけに、チンポみたいなミミズを啜えて、ぶっかけられて……正義の味方にしちゃエロすぎるぜ！」

最前列にいた若い男が早口で罵るや否や、いきなり胸元目がけて手を伸ばしてきた。青い布地の下、生クリームをかけられたババロアのような右乳房が、布地ごと乱暴に鷺掴みにされる。グイッと乳肌が指の形に合わせて歪み、今までに感じたことのない疼痛が走る。

「ひぎうっ……痛う……痛いですっ！ いや、やめて……は、離してっ!!」

「うるせえっ！ こんな格好で挑発してたのはお前だろう！」

「挑発なんてしてな……んんんんウッ！」

叫び返そうと咽喉から飛び出しかけた台詞が、胸の激痛で掠れてしまう。まるでゴムボ

ールを潰すような荒々しきで、男が雪希の乳脂肪を遠慮なく揉み始めたのだ。

自らを慰めるとき、そつと愛撫したことはある。体育の着替えのとき、友人同士で戯れに触りあつた経験もある。だが、こんなにも激しく弄ばれるのは初めて。激痛が脳天まで突き上げ、そこが敏感な雌肉器官の一つだということが、身に染みてわかる気がした。

「いやあああああ——いたつ、痛いですうつ！ やあつ……やめえて……ああ！」

弓のように背を仰げ反らせ、朱色の唇から絶叫が飛び出す。乳房が熟れすぎた果実のようにグチャリと潰れてしまうのではないかと錯覚する乱暴さ。反射的に、甲高い乙女の悲鳴が口から飛び出してしまった。

これだけ男の人がいるのだ。誰か一人くらいは助けしてくれるんじゃないか。普段とは逆の切なる願いを胸に、取り囲む男達に目で必死に訴えてみる。

——だが、返ってきた反応は、そんな甘い期待とは真逆の欲望だった。

「本当に……凄いい格好だよな。ははっ……」

「ああ。可愛い太股も丸出しだなあ。……ちよ、ちよつとだけいいかな？」

顔を見合わせ、誤魔化し笑いを浮かべた中年男二人が、おずおずと手を伸ばす。布地が途切れて露出されている白磁器のように滑らかな太股の上を、脂ぎった指先がくすぐるようにチヨコチヨコ動いた。

「ひゃんっ！ くっ、さ、触っちゃ……触っちゃダメですっ!! いやあぁっ！」

まるで油虫が這うようなむず痒い不快感が、背筋をぞわぞわと駆け上る。抑えることの

できない黄色い悲鳴が、スペルマクリームを塗りたくられた唇から断続的に飛び出す。

その弱々しい乙女の反応が更に男達を刺激したのだろうか。俺も俺もと、次々と男達の欲望を乗せた手の平が、無抵抗な肢体に伸びていく。

背後から伸びた手が、半分以上露出している白桃のようなヒップを撫でまわす。更に別の手が、背筋をなぞるように指を這わせる。まるで人々の手が、忌まわしいミミズ触手になってしまったよう。嫌悪が胸を破裂させんばかりに膨れ上がった。

「——あううううウツ!! さ、触っちゃいやあつ……お、お願いします! やめ……!」  
「あん、そんなこと言って感じてるんだろ? 乳首がぶっくりしてきやがったぜ!」

哀願する少女をあざ笑うように、胸を揉みしだく若者が冷たく言い放つ。胸元、水色のプロテクターの横がわずかに隆起している。二本の指先で摘まれた瞬間、疼痛が電流のように乳脂肪の中を駆け巡った。苦痛だけではない、甘い痺れを伴った感覚。悲鳴すらも咽喉の奥で掠れ、瞳を大きく見開き涙を浮かべることしかできなかった。

「なんだよ、やっぱりこうして触って欲しかったんじゃねえのか? こんなにいやらしく乳首を勃起させちまってよ!! ほれほれ!」

雪希の反応が加虐心をそそったのだろう。若者は更に調子に乗って、布越しに摘み上げたニップルをコリコリと弄ぶ。快感神経だけで構成された敏感な肉粒。自慰では到底ありえない荒々しさを捻り潰されているというのに、油を注がれたように快感が燃え高まる。

「ふあああつ、お願いします……こ、こんなこと……はうううつ」

「感じてるのは胸だけじゃなさそうだぜ。……ほれ、見ろよ、この股のところも」

腰の部分をまさぐっていた中年男が、ニヤニヤと笑いながら、紐状になっている部分をクイッと引つ張り上げた。陰部にシールのように貼りついていた股布が、更にきつく股間に押し当たる。スッと鋭いナイフを入れたように真っ直ぐな割れ目が青い布地に浮かび上がると同時に、じわりと水濡れが広がった。

「んウツ!? く、食い込んじゃっ……いたあぁっ……あああぁぁっ！」

元々、秘所を隠すギリギリの面積しかなかった股布が、持ち上げられたせいで更に一回り細くなってしまう。ぷっくりと割れた肉丘の形がはつきりとわかる。まるで肌に青い絵の具を塗りつけただけのよう。男達の視線が、その部分へと集中していった。

見られるだけでも、汚れを知らぬ桃肉を晒られていると錯覚してしまう。嫌悪と恐怖が下半身全体を痺れさせ、子宮がキュッと収縮し、膣道全体が痙攣し始めた。

じゅわぁつと熱いものが流れ出す感覚と共に、股布の染みが更に大きくなっていく。恐怖のあまり、わずかに失禁してしまったのかもしれない。

「綺麗な割れ目ちゃんか濡れてるな。こんな風にまさぐられるのが気持ちいいのかよ!」  
「まさか、気色悪いミミズのチンポ啜えながら濡らしてたのか? ありえねえ……」

「違いますっ……そんなこと……ほ、本当に……いやぁあぁっ、助け……はふうっ!」  
救いを求める悲鳴も、再び胸を鷲掴みにされた激痛で押し止められてしまう。

凶悪なワームノイド相手に一步も引かず、一年にも渡る長き間勝利を積み重ねてきた歴





戦の勇士の面影は欠片も見えない。欲望という名の檻に捕らわれ、ただか細く泣き叫ぶしかできない哀れな少女の姿。その儂さが、剥き出しの性欲を更に煽っていく。

「写真見る度に思ってたんだ。このむっちりとしたお尻、一度でいいからこうしてこねくりまわしてやりたいってさ！ あはっ、夢が叶ったぜ」

「いい形の胸だよなあ。俺はこれくらいが大好きだ。赤髪の方の、雌牛みたいにバカでかい下品な乳も悪くないけどよ」

男達は荒い吐息を漏らしながら、一切の遠慮なく雪希の肢体をまさぐる。浴びせかけられたミミズの白濁液が、手の平で布地や肌に擦り込まれていき、嫌なべたつきが身体中あちらこちらに生まれた。意識が吹き飛びそうな羞恥で、顔が燃え上がる。

「んっ、ほっぺが真っ赤になってるなあ。気持ちいいのかね？ ほれ……ほれ！」

雪希の反応を面白がるように、股布を引っ張る中年が更に力を込めて引っ張り上げる。どんな攻撃にも負けない強靱なスーツ。その布地が、膨らむ雌肉を押し潰すように密着する。割れ目の入り口が押し広げられて、一番敏感な肉花弁と擦れあってしまう。肉ヒダに生まれる鮮烈な甘痛。膣穴と肛門に無意識に力が入り、きつく締まる。じゅわあっと染み出す透明汁で、股布の染みがまた一回り大きくなってしまった。

「ひっ、引っ張らないでくださいっ！ いたっ……食い込んで……はぐうっ！」

ミミズ達の腐臭と、男達のすえた汗の匂いが籠もっていた周囲に、まるで花園のように甘く爽やかな香りが立ち込める。男を知らぬ乙女特有の甘酸っぱい蜜臭。雄の本能を刺激

してやまない香りに、男達の興奮はますますエスカレートしていった。

「おいおい、凄い濡れ方だなあ。もう我慢できないんじゃないのかい？ だら、おじさんが直接可愛がつてあげようかなあ……ははっ」

「乳首もコチコチだぜ。そうだな、そろそろご開帳といきますか」

男達は呟きあい、乙女の白く美しい裸体を拝もうと、布地を乱暴に引つ張り始める。

「やあああつ！ ダメです……本当、本当……お願い……」

肌から無理に剥がされそうになる布地の感触が、羞恥の熱で沈みかけていた雪希の意識を覚醒させた。こんなに大勢の男の前で服を脱がされるなんて、少女にとっては死よりも苦しい恥辱拷問。絶対に耐えられることではない。

「ほら、じっとしてろ！ くそっ、なんでこんなに脱がせ辛いんだ!!」

男達は雪希の悲鳴に構わず、欲望を満たすため、苛立ちながらも肌と一体化した布地をひんむこうと努力を続ける。ヒップの部分の布地が次第に割れ目へと食い込んでいき、胸元の布地もずれ始める。朱に染まり、玉のような汗を浮かべる美肌が少しずつあらわになるにつれ、地鳴りのように低い歓声が沸き上がる。ミミズのうねる音よりも恐ろしいその声が、雪希の心を容赦なく押し潰す。

「いやあつ——もう、もう……いやあああああああああッ!!」

一際大きな悲鳴を上げた瞬間、スクリーンに映し出されたエレンの嘲笑が瞳に映った。

『アハッ、無様ねえ。散々助けてやったクズ共に弄ばれるなんて』

「あなた、一体なにを……なにをしたの！　こんな絶対に普通じゃない……はうっ！」  
乱暴な手の動きに布地だけでなく肉までも摘まれ、身体中が鈍い痛みに包まれる。顔を歪めながらも、強い眼差しでスクリーンを睨む。衣装が男の欲望を煽る破廉恥なデザインだとしても、一人の例外もなく男達が襲いかかってくるなんて、明らかに異常だ。

「なにか？　別に……強いて言うなら、あなたもいやというほど嗅いでるミミズ達の生臭い精液……その匂いに、生物の理性を抑え込む効果があるくらいかしら」

「理性を……抑え込むですって!？」

『ええ。といっても、あなたみたいに意志の強い者ならば、はね除けられる程度ですけどね。ワタシもビックリだわ。まさかこんなに容易く暴走してくれるなんて……その連中、よっぽどあなたに欲情してたんでしょうねえ。恩知らずにもほどがあるわ』

「嘘……そんな……くっ……お願い！　みなさん、目を覚ましてください!!」

必死に訴えれば、きつと目も覚めるはず。そう願って叫ぶが、男達は美肉を前にしたライオンのように瞳をギラつかせ、スーツを剥ぎ取ることに夢中のままだった。

「チクショウッ！　ちつとも脱がせやしねえ。肝心な部分はお預けかよ……クソガッ!!」

肌と一つになったスーツの抵抗。苛立ちも限界に達したのだろう、背中から剥ぎ取るうとしていた男が、雪希の背を強く蹴り飛ばした。踏ん張ることもできず、そのまま前のめりに地面に倒れ伏し、四つんばいの体勢になってしまう。食い込み、ほとんどTバック状態になってしまった布地。そこからはみ出した桃尻が、衝撃で扇情的に揺れる。それを見

下ろす男達が一斉に生唾を飲み込んだ音が、雪希の恐怖をますます煽った。

「ははっ……裸もいいけど……折角ステキな服を着ているんだ。このままもいいなあ」

雪希を蹴り倒した中年の男が、舌なめずりをしながら屈み込み、丸出しになった尻肉を両手で鷲掴みにした。同時に股布に押し当てられる、熱く硬い感触。先ほど顔に当てられたミミズの頭によく似たそれがなんなのか、振り返るまでもなくわかった。

「おっ、オチンチン……オチンチン当てられてる……いつ、いやっ……なにを!？」

「聞かなくてもわかるだろう？ 大丈夫、痛くしないから……なっ、な？」

叫ぶ中年男は、尻肉に指が食い込むくらい強く掴み、グイグイと腰を押しつけてくる。股布の上に浮かぶ割れ目に、表面の薄皮一枚がプヨプヨと柔らかく、その下にマグマのように熱い塊を感じる棒が強く押し込まれた。同時に、他の男達も次々にズボンを脱ぎ捨て、猛り狂った肉棒を曝け出していく。

ミミズ達とは一味違う、湿り気のあるイカ臭さが霧のように周囲を包む。太いもの、細いもの。長いものから小さいもの。先が出っ張ってたり、逆にドリルのように先細りだったり。一人一人微妙に形の違う肉棒林を目の当たりにし、悲鳴を上げることができない。

「いやっ、こんなの絶対にいやああああ——いやなのおっ!!」

これから、この勃起肉棒達で身体を弄ばれる。初めての瞬間は、大好きな人との楽しいデートの後、シックなホテルの部屋で二人甘く。密かに膨らませていた乙女の妄想とはまるで違う最悪のシチュエーション。金槌で頭を横殴りされたようなショックを覚える。

『ああ、そうそう。別に構わないわよ、抵抗しても。ワタシが手を出すなど命じたのはワームノイド達にだけ。そのゴミクズ共を傷つけようが殺そうが、あなたの家族の身の安全には一切関係ないわ。助かりたければ、遠慮なく力を使いなさい。ワタシの可愛いワームノイドを何体も潰してくれたようにねえ』

笑いを押し殺すような声で言うエレン。悪魔の誘惑に、心が激しく揺れ動く。

(いくら襲われそうになつたからって、このインビンシブルジャケットの力を人に向けるなんて……そんなこと……)

「世界を救え」とこれを託してくれた兄の想いに背くこと。だが、そうしなければ、男達の欲望から身を守ることはできない。葛藤する間にも、股布に食い込む肉棒の感触が深くなってくる。顔の傍にも数本の肉棒が近づけられ、無理に掴み上げられた手にも怒張を握らされてしまう。濃密になる精臭に頭がクラクラし、黒い衝動が胸の奥で肥大していく。

(仕方ない……わよね。ここで抵抗しないと……奪われちゃう。処女が……)

様々な葛藤が一つ一つ霧に隠されるように消えていく。一步引いたところで、監視するように立ち尽くすワームノイド達から放たれる白濁の匂い。理性を麻痺させるといふ悪臭の作用なのだろうが、そうだと認識することすらできなくなっていた。

「インビンシブルパワー……マキシマ……」

力を発動するための言葉を、乾いた白濁粘液の貼りついた唇が紡ごうとした瞬間。

「やめてよおっ！ ペルデーターをいじめないで!!」

「おじちゃん達、そんなことしちゃメッなおっ〜！」

甲高く、そして力強い声が、沈みかけていた意識を呼び起こす。わずかに顔を横に向け確かめる。人垣の向こう、男達の暴走に眉を顰め、嫌悪感剥き出しで顔を背ける女達の足元に立ち並ぶ幼子達が必死の形相で叫び声を上げている。真つ赤な顔でむきになって叫ぶ男の子、大粒の涙を零しながらも手を振り続けてくれる女の子。一人一人の声が、衝動に塗り潰されかけていた正義の戦姫としての誇りを呼び覚ましてくれた。

（ダメ！ この子達の前で、人間に手を上げるなんて……裏切るような真似をできるわけないじゃないの……耐えなきゃ、絶対……絶対……）

言い聞かせるように心の中で何度も繰り返す。だが、目の当たりにする赤黒い肉棒のおぞましさと、股布ごと淫穴へめり込もうとしている怒張の圧迫感。欲望をぶつけようと近づいてくるおぞましい気配達が、衝動的な抵抗を引き起こしかねない。

「ダメ……ダメえ……くっ、はあっ……ああっ」

あの子達の前で正義の味方であるインピンシブルシスターズとしての自分を保ち続けなければいけない。……たとえ、大切なものを失うとしても。

顔をアスファルトに伏せ、身体を支えていた左手を自由にする。すぐさまバイザーの横に仕込まれている緊急時用の操作ボタンを、決められた順番で押していった。

『緊急停止モードへ移行します』

バイザーディスプレイに表示された赤文字がすぐに消え、スーツ全体に凜と凜と漂っていた

オーラのようなものが失われていく。あれだけ肌と一体化していた布地も急に柔らかくなり、ただの水着のようになってしまった。

(力そのものを封印しておけば……傷つけることはないもの)

苦肉の策だが、すべてが敵の手の内で進んでいる今は、その流れに乗りながら機会を待つしかない。普段の冷静な判断力を取り戻した雪希が、心の中で呟いた直後。

ズリユツ——ズリイイツ!

「ひゃつ、くううっ!」

淫穴に走った強烈な摩擦。力を失った股布が、押し込まれる肉棒によってずらされ、肉花弁を擦ったのだ。ピチャと卑猥な水音が高鳴り、膣穴全体を痙攣させる電流が駆け抜けて、伏せていた顔を跳ね上げてしまった。

「おっとつ、自分から啞え込みにきてくれたか。ありがと……よっ!」

「ふえあ……むぐうっ?! んんんっ……じゅぶんっふう、はみゆうっ!」

白濁ジェルで固まりかけていた青髪を乱暴に掴まれるや否や、悲鳴を上げて開いていた唇目がけ、雄棒がねじ込まれた。ミニズ触手よりサイズは小さいが、まるで鉄の棒のように硬く、熱湯のように熱い肉棒。悪臭で麻痺した鼻腔にまで届く、濃密な雄の匂い。鼻の穴にまで細いペニスを挿入されたようにすら思えた。嘔吐感に胃が痙攣し、子宮が雌の本能を呼び覚ますように甘く疼きます。ジュンジュンと染み出る熱液が狭い肉道の流れ落ちていく感触が、妙にはつきり感じられた。





妙に嬉しそうな略奪者の声が、どこか遠くの世界のこのように聞こえる。乱暴に刺し貫かれた処女粘膜に走る焼けつくような痛みだけが、ギリギリ現実に引き留めてくれた。

(嘘っ、入れられちゃった……そんな、中……初めて……私の初めてえっ!!)

見ず知らずの、ましてや醜い男にあっけなく奪われてしまった純潔の証。正義の戦姫としての自らを貫くためだと言いついてみても、そのショックは計り知れない。瞳に大粒の雫が浮かび、白濁液で汚れた頬を洗い流すように垂れ落ちていく。固く閉じた瞼の裏側に、何故か優しい兄の笑顔が浮かび上がってきた。兄のため、妹のため、人々のため。ただの肉粘膜が破られただけのこと。ただそれだけのこと。全身を包み込む激痛と絶望を振り払うように言い聞かせる少女を、欲望で暴走した男達が容赦なく颯り続ける。

「かかつ、こりゃとんだご馳走だったなあ。ほれ、ほれ！ 遠慮なく感じな！」

ジュブリユルッ！ ジュリユッ、ズビュブブッ！

調子に乗った中年男は、ミミズ達の汚液のようにべったりとまとわつく声で嘔きながら腰をゆっくり振り動かし始めた。傷ついた腔粘膜が硬い怒張に圧迫され、鼓動に合わせて身体の芯を串刺しにされたような激痛が駆け巡る。挿入の振動でずれた股布が小刻みに触れ、割れ目の入り口を擦る。鈍い痛みと共に、火花が散るような快感が肉花弁に生まれ、割れ目全体が次第に麻痺していった。まだ股布の下で息を潜めている菊門にまで刺激が届き、小刻みな皺が深くなり、小穴が窄んで更に狭まってしまふ。

「あぶうっ……んぐううっ、あむっじゅるうっ、ちゅぷううっ——はふうっ！」

「おおっ……そうだ、しつかり啜えろ！ もつと奥までだ……くう！」

込み上げる絶叫が、口を汚す肉棒で突き戻される。髪をしつかり掴まれ、小鳥がエサをついばむような熱心さで前後に首を振らされる。栗の実のように硬い先端が、咽頭目がけて鐘突きの如く衝突し、息が詰まりそうだ。

「んぐあっ……はむううっ、じゆるぶぶぶぶっ！ おえっ……ひやぶうっ！」

ミミズが挿入<sup>はい</sup>ってきたときと同じような息苦しき。瞳に浮かぶ涙粒が更に一回り大きくなってしまう。破瓜の余韻に絶望する間すら与えてもらえない。

「おら、俺のもだ！ くそっ、待ってられねえって!! しつかり手で扱け!!」

「ふあ、ふあい……んんっ……ひうっ……ちゆうぷう」

命じられるまま、肉竿を握らされた右手を前後に動かし奉仕を始める。その姿は、男達に好き勝手弄ばれる肉人形。仕方ないことだとわかっていても、コールドールのように黒くドロドロとした感情が胸に込み上げ、気が狂いそうになってしまう。スーツの機能を停止させていなかったならば、発作的に力を使っていたかもしれない。

「ほら、ぼやぼやするな！ もつと奥まで啜えろよ！ ミミズ達にはサービスできて、人間の俺達にできないってこたあないだろうが」

「ふあ、ふあい……んちゅばあっ、あむうっ、れろおれろおお——むうふっ！」

頬を軽く打ち叩かれ、きつい言葉で命じられると、それに応えて口の中で舌を素早く回転させる。竿を裏側に走る筋に沿って舐め上げると驚くほど敏感に反応し、先から染み出

す苦い汁の量が増していった。舌の奥に広がる雄の味。何故か妙に背徳感を煽られ、アルコール入りのチョコレートを食べたときのように、胃がカッと熱くなった。

「凄いなあ、お嬢ちゃん。お汁の量がどんどん増えてきて……ああ、いいぞおつ」

ジュブリユウツ、ジュブブブツ、ジュボブブブウ——ズブリユウツ!!

ピストンに合わせて高鳴る陰唇の水音が、ますます激しくなっていく。痛みも次第に治まり、デコボコの肉棒が壁を擦る振動が尾てい骨まで響いてくる。素早いストロークに合わせて白く泡立った蜜液が吹き零れ、アスファルトにポタポタと垂れ落ちていった。

そのあられもない姿を、人質となっている女性達が、眉を顰めて見守っていた。

「あんなに濡らして……はしたないわ」

「恥ずかしい格好して……まるで娼婦ね。ミミズでも男でも、なんでも喜ぶのかしら」

井戸端会議の噂のようにボソボソと交わされる言葉が、おぼろげに雪希の耳にも届いた。同じ女性ならば、自分の状況を哀れみ救いの手を差し伸べてくれるかもしれないと心の片隅で期待していたのが、甘い考えだったと今更ながら気付かされる。

（頑張ったのに……私も桜花も、一生懸命頑張って戦ったのに……）

感謝してもらうために戦ってきたわけではないが、それでも落胆は否めない。張り詰めた気持ちや緩むと、その分、膣穴に走る快感が大きくなる。粘膜に広がる電流のような痺れ。割れ目の頂点で、薄い桃色をした肉豆が自然とその頭を覗かせた。ピストンで揺れる寧丸袋と衝突する度に、閃光のような甘美が弾ける。ほとんど丸出しになった尻肉の朱色

が濃くなり、快感に溺れ始めているのを、声を出せない口に代わって雄弁に物語る。

「もぐうつ、んんぐうつ——ひゃつちゅいつ……ひぎいつ！」

くぐもつた甘声が、肉竿に貼りつく唇の隙間から零れ落ちる。信じてくれる子供達のために、捕らわれてしまった拓海と桜花を救うために。自らの使命を繰り返し心の中で咬いてみても、自慰とは比べものにならない荒々しい快感が身体の中で嵐となって吹き荒れる。「おやおや、お尻の穴までこんないやらしく震わせて……スケベな娘だっ」

バックから刺し貫く中年男が、股布の間に指を差し入れ、肛門を親指で穿り始めた。

グリユツ、ヌチュルウ——ゲニニイッ。

皺も深くなるほど窄んでいた穴が無理矢理こじ開けられると、痛みよりも先に甘美な疼きが浮かび上がる。膣穴に走る熱感と一つになって、意識が一気に白く染まる。

「おひっ——んんっ、ひゃぶうつ！」

汚らわしい排泄器官すら、欲望のおモチヤにされてしまっている。そんな部分に甘美な刺激を覚えてしまっている自分の身体が信じられない。

（おかしいよお……私の身体、おかしくなって……熱いのが止まらないっ！）

突き上げに合わせ、タプンタプンと悩ましく揺れる乳房。その奥で、心が軋んで悲痛な叫びを上げている。それなのに、全身を流れる快感は、どんどん高まる一方。埋まる肉竿の圧迫感が子宮まで響く。割れ目からわずかに見える肉ヒダがきつく締まり、怒張を食い千切らんばかりに締めつけた。

肉壁の蠢きを歓迎するように、ゴツゴツとした肉怒張が咽び震える振動。膣道の天井、コリコリとしたGスポットが抉られて、一瞬目の前が真っ白になってしまふ。

「おおっ、出る！ 出るぞおっ!! 中に……おおおおおおおっ!!」

ドブリユウウウウウ！ ジュブブブブッ！ ドクドクドクッ！

「んごおっ……おぶっ……ンンンンッ！」

呻き声のような絶叫と共に、膣穴の奥深くで爆発が起こる。溶岩流のような灼熱が子宮目掛けて流れ込んでくるのがはつきりとわかった。細かく痙攣する肉棒。見知らぬ男の子種汁を注ぎ込まれたんだと嫌でも気付かされる。妊娠への恐怖を覚える前に、津波のように下半身から雪崩れ込んでくる快感。意識が一気に吹き飛ばされた。

「俺も……俺も出さずぞっ！」

「こつちもだっ……おら、全部しつかり味わえよっ!!」

ビュビュビュッ！ ビュチャッ……ビュルルルルッ!!

乱暴な叫び声と共に、手の中で、口内で、肉棒が同じように膨らみ弾けた。肩から背中にかけて、汗と粘液で汚れた布地の上に白液が雨となって降り注ぐ。口内で射精する肉棒は途中で引き抜かれ、残りの白濁液はまるでリンスのように青髪に浴びせかけられた。

「ひゃふああつ！ あちゆう、いっぱいいい!? イイイイッ、いきうう——クッウウッ!!」

ようやく自由になった唇から、飲み干せなかった精液と共に嬌声が飛び出す。叫ぶ甘声と共に、残されたわずかな意識の欠片も飛び出していき、快樂だけが全身を包み込んだ。



膾道が、渾身の力で何度も痙攣を繰り返す。未だ硬さを失わない肉棒が粘膜と強くぶつかる度に、火花のような快感が頭まで突き抜けた。

膾内に満たされた熱液が、子宮の中にゆっくりと流れ込むのがはつきりわかる。空虚な肉室が、見知らぬ男の子種汁で満たされている。虚ろな意識の中、その事実を嘔み締めると、どうにもならない絶望感が込み上げてきた。

「ふあつ……むう……も、もうらああ——はふう……」

絶頂の余韻が、頭の先から爪先までサツと引いていく。目の前にシャッターを下ろされたように視界が黒く塗り潰され、そのまま力なく地面に顔を伏せ、放心してしまった。

「アハハハッ！ 凄いイキ方。同族の雄に犯される方が、快感が強いのかしらねえ？」

頭上から聞こえてくる怨敵の高笑いに言い返す気力もない。子宮にたっぷり注ぎ込まれたドロドロとした不快な液感。絶頂の余韻が引くと、どす黒い絶望が胸に広がった。

「……できちゃう……子供……ひゃうう……」

無理矢理処女を奪われ、膾内射精までされてしまった。乙女にとって最悪の拷問だ。

「やめてよお！ お姉ちゃん、可哀想だよー！」

「ペルディータをいじめないで!! ママ、離してよー！」

戦姫としての誇りを支えてくれた子供達の声も、次第に遠ざかっていく。一緒にいる女達が、子供達の目には悪影響だと引き離そうとしているのだろう。言い争う気配でなんとなく察しがついた。それでも、必死に自分へ声援を送り続けてくれるその想いが、闇に沈



みかけた心を灯火となつて照らしてくれた。

『ミミズ……触るなあっ……このっ、このおっ……ひぐうっ！』

『桜花……桜花あっ！ くっ、やめろ……妹達に手を出すな……ああ』

スクリーンの方から聞こえる、桜花と拓海の悲痛な叫び声。絶望を味わっているのは自分だけではない、大切な家族も同じ苦しみを味わっているんだと思ひ出させてくれる。

『諦めない……諦めないもん……絶対……絶対……くっ……』

「おら、おっさん、次替われよ！ 順番つかえてるんだからよ！」

少女の決意をあざ笑うように、肉欲で暴走した男達は、次々に猛り狂った肉棒を押しつけてくる。引き抜かれたばかりの膣穴、放たれた白濁液が逆流してくる間もなくすぐに次の肉棒がねじ込まれ、口にも手にも勃起竿が押し当てられた。

「おごっ、んぐっ！ ぶはあっ、み、みなさん……お願い、正気に戻っ——くはあっ！」

肉棒を啜えながら必死に訴える言葉も、子宮を直接貫くようなピストンで妨げられてしまう。痛みと絶頂で麻痺していた膣粘膜が、摩擦の疼痛で埋め尽くされていく。

『いつまで強がつていられるかしらねえ？ まあ、じつくり楽しんでなさいな……アハハッ、ハーハハハアッ!!』

狂気じみた宿敵の高笑いをBGMに、青髪の戦姫は、針の穴ほどの希望に望みを託し、いつ終わるとも知れない肉棒責めを甘んじて受け続けるのだった。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**